
R a i n

咲 美瑠紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Rain

【Nコード】

N6642T

【作者名】

咲 美瑠紅

【あらすじ】

私の住む地域は現在台風接近中。

傘を投げ捨て遊んだ日の朝。夢の中の傘と同じように、私も空を飛んでいた。

いち！ 空飛ぶ傘と私（前書き）

実話とフィクションを合わせました。

いち！ 空飛ぶ傘と私

あ、気分良いかも。

その時私は、なんとなく青春を感じていた。

なんて。そんな大層なものではなく、ただ単に土砂降りの中傘があるのに傘をささずに友達とダッシュしているだけの話だが。

体育祭延期の日曜日。なぜか学校があり（そこでじゃあ休みの日は学校消えるんだという人は単なるアホである）、部活も終わった五時過ぎ。休みの日だからか、終わるのが早かった。

私が住んでいる地域は、現在台風接近中。よって、雨の雨に風の風でこっちは風邪ひくぞという状況。

ものすごい風で友達の一人の傘がぐにやぐにやになっていたり、もう一人は馬鹿傘になっていた。

友達の考えた、『ヘイ！マミー作戦』は、公衆電話がどこにもなかったことから失敗に終わった。

そして傘がやばくなっている今、私たちに残された選択肢は二つ。いち！傘を差したまま歩いて帰って、傘が…

いち！傘を閉じてダッシュ。時間短縮？
というもの。

さあ、どうする？

てなわけで、私たち四人が選んだのは、何故か二つ目の傘閉じダッシュ。なんで？

「きゃ~~~~！きゃわ~~~~！」

思ったより、面白い！！

走り終えたとき、私の頭、顔、服はずぶぬれになっていた。
なんて言い訳しよう。一瞬思ったけど、まあいいや！

なんかスカツとした。

その後、傘をしつかりさして残りの道を歩き出した。

夜。

時計の針は十二時を回り、私も当然寝ていた。

夢の中、私は傘で空を飛んでいた。

風が気持ちいい。下に広がる海、島々。きれい。

鳥になった気分。

楽し～～～～い！

良い夢だったなあ。

夢の余韻がまだ残る中、目をあける。

は、はあ？

幸せな気分で目を覚ました私の眼下に広がっていたのは、青い空
と霧のような雲だった。

しかも、どんどん落下を始めている。雲が通り過ぎていく。はっ
きりいって、怖い。

たくさんの幹がねじられるようにして一つの大木を作り上げていた。

その木の何かに惹かれ、もっと近寄る。

ぴたっ

中に、何かいる？

よく見ると、その木の中央には人が一人入るくらいの空洞があった。

その中には、本当に人が入っていた。

「え」

女の子だった。髪の長い小柄な女の子がその空洞の中で座っていた。

ぴくりとも動かない。ねむっているのか？

とりあえず、そっとしておこうかな。

こんなすごい木の中に入っている彼女は、とても神聖なものに思えたから。

もう少し散策しよう。

しばらく行くと細い川があった。

「ん？」

視力のいい私から見ると、それは人間のように見えた。

さっき女の子を見た時点でここに人間がいるのはわかっていたが、

まだいるのだろうか。

もう少し近づくと。

その人に見える何かは、川岸で四つん這いになって、水面に口をつけている。

もっと近づくと。

気付かれたらしい。

首だけ私の方を向いてこっちを見ている。

ちょっとだけ近づくと、顔がはっきり見えた。

男の子だ。けっこうかっこいい。

少し長めの髪を紐のようなもので一つに束ねている。

目は、赤みがかかった琥珀色で二重瞼。

かっこいいというか、かわいいに近い。

その少年が、口を開いた。

「……………誰？」

声、かわいい。

いち！ 空飛ぶ傘と私（後書き）

ありがとうございました。
かくのたいへんだった〜

に！ 楓とカエデ（前書き）

最後の数行は今日、他はいつ書いたかきおくがない…

に！ 楓とカエデ

「へー、ふーん」

せつかく話してやってんのに、この反応ですか…。

五十センチぐらい離れたところに座っている少年、アキを横目で見ながら溜息をつく。

はあ～～～……。

『誰』と言われたから、答えた。『どつから来たの』と言われたから、答えた。『なんで来たの』と言われたが、答えられなかった。自分でもわからなかったから。

自分なりに頑張つて説明したつもりなのに、アキは暇そうに土いじりをしている。

「もう、いい。話さない」

むかついたから言つてやった。すると、予想外の反応。

言葉を吐いた瞬間、アキがばっ、とこちらをむいた。

「え、ごめん、ついつい……」

まさかまさかの反応に、こっちがたじろいてしまつ。

「じ、ごめん……」

なんで私が謝らなきゃ……

「わかつたよ。今回は許してあげるからさ」

「ほんと??」

目の色変えてきたよ。調子いい。少し呆れる。

「ねえ、カエデの木、見た？」

「え??」

カエデの木? そんな木、なかった気がするんだけど…

「その木、どの辺にあるの?」

「ん、少し前の開けたとこ」

もしかして、あの木のこと? (一話参照)

「あのさ、それ、ねじれた感じの?」

「うん」

それカエデじゃないんじゃ…

「カエデだよ!!!」

「え!?!? 読唇術? どうやって心読んだの!?!」

そんなキレなくなつていいじゃん。

「だつて、あれはカエデの木の形じゃないじゃん」

「ううん、あれ、カエデだよ。楓かえでがいつてるもん」

は?カエデが自分をカエデだつて…、この植物は言葉もしゃべ
るの?

「ごめん、意味不明」

「え〜〜」

「わかるように説明して」

「は〜〜い」

「ねえ、あの木、もっと近くで見してみた?」

言われて思い出すのは、木の空洞にいたあの少女。

「うん」

「中に女の子いたでしょ」

「ああ、いたね」

「あの子の名前が楓なの」

「で、あの木もカエデ」

「はあ」

「だぶんもう少して目を覚ますと思つ」

「どっちが?」

「人の方」

「なんで」

「もうすぐ春だから」

「今は冬なのね」

「たぶん」

「たぶん??」

たぶんって…: どんだけ自分の周囲に無関心なの？

それ以前に、私そんな遠くの国にきてたの？

「で？」

「それだけ」

ああ、そうですね。あつそ。

「これから行かない？そろそろな気がする」

「別に、良いけど」

数十分ぶりのカエデの木。先ほどと変わらず、どっしりと立っていた。

アキと二人で中をのぞく。

あれ？

いない。さつきまでいたあの女の子、楓ちゃん、だっけ？が、いなくなっていた。

「あ、今日だったんだ」

アキが木の上の方を見上げ言う。すると。

ひよこっ

枝の隙間から、一人の少女が顔を出した。

木漏れ日を浴びてキラキラ光るホワイトシルバーの髪、すきとおるコバルトブルーの瞳。

どこか神聖な感じのする彼女は、鋭い瞳でこちらをみていた。

と、突然木の上から飛び降りてきて、見事な着地。

「久しいな、アキ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6642t/>

R a i n

2011年10月8日19時43分発行